

## 「取るに足りないしもべ」

ルカの福音書 17:7~10

### はじめに

前回のメッセージから少し間があいてしまいましたので、ここまでの文脈を思い出すためにもここ二回ほどのメッセージの中で解き明かしたイエシュアのとえに秘められた「神の国の奥義」を簡単に振り返っておきたいと思います。

#### (1) 「金持ちとラザロ」

「金持ち」とはパリサイ人に代表される律法主義、イエシュアを信じないイスラエルを指しています。そして「ラザロ」は教会、イエシュアを信じる異邦人を指しています。しかしこの話の結論はこの両者ではなく「金持ち」の「五人の兄弟」にあります。「五」とはモーセ五書とも呼ばれるトーラーを指し、また世の支配者に逆らう五人の王（創 14 章）をも指しており、これが終わりの日に全世界を支配する反キリストに立ち向かうイスラエルの残りの者を指しており、彼らが「モーセと預言者」に示されたメシア、イエシュアの御国の福音を聞く、信じるようになることが表されているのです。

#### (2) 「つまずきをもたらす者は…ひき臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれるほうがまし」

「つまずきをもたらす者」とはイスラエルを指し、「ひき臼」はイエシュア（に対する信仰）です。これがイスラエルの首に結びつくとはイエシュアとくびきをともにする、つまりイエシュアとともに働くことを表し、「海に投げ込まれる」とは、世の終わりの大患難の中でイエシュアをメシアとして信じるイスラエルの残りの者が宣教の働きをなすことを表しています。

#### (3) 「七回罪を犯しても、七回悔い改めるなら赦しなさい」

イエシュアが地上再臨される前の患難の七年間の中でイスラエルは七回つまり完全に主に立ち返ることが表されています。これもまたイスラエルの残りの者を指すたとえです。

#### (4) 「からし種の信仰があれば、桑の木が海の中に植わる」

「からし種の信仰」とはイエシュアに対する信仰を持ったイスラエルを指し、「桑の木」はエルサレム（神殿）を指しています。これが「海の中に植わる」とは反キリストの手に神殿が奪われることを指しており、その時「からし種の信仰」すなわちイエシュアを信じるイスラエルの残りの者が起こされるということが表されています。

このように、ここに記されたイエシュアのとえはすべて大患難と呼ばれる終わりの時代に起こされる「イスラエルの残りの者」について預言されたものと解釈することができます。しかしこれはイエシュアがたとえの中に隠された「神の国の奥義」とされているものですから、簡単に理解できるものではなく、いや、正確には誰でも理解できるものではありません。なぜならこの「奥義」のことをヘブル語でソ

ード(πίσ)と言いますが、これが聖書で最初に使われた箇所、ソードが誰でも入れる、誰でも理解することができないものであるという性質が示されているのです。

創世記【新改訳 2017】

49:5 シメオンとレビとは兄弟、彼らの剣は暴虐の武器。

49:6 わがたましいよ、彼らの密議に加わるな。わが栄光よ、彼らの集いに連なるな。彼らは怒りに任せて人を殺し、思いのままに牛の足の筋を切った。

49:7 のろわれよ、彼らの激しい怒り、彼らの凄まじい憤りは。私はヤコブの中で彼らを引き裂き、イスラエルの中に散らそう。

これはヤコブがその晩年、息子のシメオンとレビについて預言した箇所です。「わがたましいよ、彼らの密議に加わるな」と訳されているのが本来の「奥義」ソードです。この預言は一見シメオンとレビを非難しているように見えて、実は「たましい」ではこの密議に、奥義に入れない、知りえないと言っているのです。「たましい」ネフェシュは生命全般を指すもので、生きているあらゆる人を指します。しかしそれだけでは「奥義」には入れないのです。これに入るには「たましい」ではなくルーアツハ、神の「霊」が必要なのです。

このシメオンとレビについて、創世記 34 章を出来事として見るならば狡猾で残忍な者という印象を受けます。しかしこの時この二人が立ち上がらなければヤコブの娘ディナも、ひいてはヤコブの家全体もシェケム（背を向ける、背くという意味）という異邦人の家に飲み込まれていたのです。つまり彼ら二人はイスラエルの家、血統を守り、そればかりでなく略奪によって逆に多くの異邦人を奪い、イスラエルの家に取り込んだのです。そのような視点でぜひ創世記 34 章を改めて読んでみてください。するとそこにも終わりの日、イスラエルの残りの者が立ち上がり、大勢の諸国の民を救いに導くというその「型」が見えてきて、これを「のろわれよ」と言ったヤコブの預言が、御怒りの日とも呼ばれる世の終りの大患難の中に置かれるそれを指していることに結びつくのです。そのようなシメオンとレビの「密議」それがソード「奥義」なのです。ちなみに兄のシメオンは「神の声を聞く」という意味の名で、弟レビは神と民を「結ぶ」イスラエルの祭司の部族の長です。つまり神の御声、御言葉に聞き従う祭司たちの「密議」、たましいではなく神の「霊」によってそれを知る、それが神の国のソード「奥義」なのです。このように、「奥義」ソードという言葉自体がそもそもイスラエルの残りの者を、それを用いられる終わりの日の神のご計画を指しているのです。つまりヘブル語の視点で捉えるならば、イスラエルの残りの者を指し示さない「神の国の奥義」などはありえないということになるのです。なぜならこう預言されているからです。

ミカ書【新改訳 2017】

2:12 ヤコブよ。わたしは、あなたを必ずみな集め、イスラエルの残りの者を必ず呼び集める。わたしは彼らを、囲いの中の羊のように、牧場の中の群れのように、一つに集める。こうして、人々のざわめきが起ころ。

この預言にあるように、主のご計画は「イスラエルの残りの者を必ず呼び集める」ことすなわちイスラエルを救うことにあり、そして「人々のざわめきが起ころ」こと、すなわち「ざわめく」という意味のフー

ム(𐤇𐤓𐤁)初出箇所である申命記 7:23 にあるように主がイスラエルの敵を「大いにかき乱し、ついには根絶やしにされる」こと、敵を滅ぼすことつまり、イスラエルを救い、その敵を滅ぼすことにあるのです。ですから父なる神のご計画すなわち御子イエシュアの御業は、イスラエルの残りの者なくしては決して完成し得ないのです。この重要性を思いながら今日の箇所にも目をとめてまいりたいと思います。

## 1. おまえはその後で

ルカの福音書【新改訳 2017】

17:7 あなたがたのだれかのところに、畑を耕すか羊を飼うしもべがいて、そのしもべが野から帰って来たら、『さあ、こちらに来て、食事をしなさい』と言うでしょうか。

17:8 むしろ、『私の夕食の用意をし、私が食べたり飲んだりする間、帯を締めて給仕しなさい。おまえはその後で食べたり飲んだりしなさい』と言うのではないのでしょうか。

ここでイエシュアはまた食事、食卓を用いたたとえを語られています。以前の食卓のたとえはルカ 13:28~30 でそれはまさに「神の国の食卓」のたとえで、その結論は「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」というものでした。そしてここでの食事のたとえもよくよく読むならば同様のメッセージを持っていることがわかります。上記にたとえられたしもべは、決して先に食卓に着くことはなく、必ず「後で食べたり飲んだり」する、ということが語られており、つまりこのたとえもまた「先にいる者が後になる」という同様のメッセージを持っているのです。つまりこの「野から帰って来た」しもべとは先にいる者、主に立ち返ったイスラエルの残りの者です。しもべとしての彼らの働きは、悔い改め、主に立ち返ってからこそがその本番です。なぜならイスラエルの残りの者は世の終わりの大患難の中で大勢の諸国の民に御国の福音を宣べ伝え、彼らを天の御座に周りに送るという重要な役目を担っているからです（黙示録 7:9）。これはまさに天で行われる子羊の宴会を飾るような働きです。このような働きをなした「その後で食べたり飲んだり」する、すなわち神の国の食卓に着くことになる、それがまさに先の者が後の者となるしもべ、イスラエルの残りの者を指し示しているのです。

## 2. 感謝

ルカの福音書【新改訳 2017】

17:9 しもべが命じられたことをしたからといって、主人はそのしもべに感謝するのでしょうか。

17:10 同じようにあなたがたも、自分に命じられたことをすべて行ったら、『私たちは取るに足りないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」

「感謝する」と訳されているヘブル語はヤーダー(𐤏𐤃𐤁)で本来は「ほめたたえる」と訳されている言葉です（創 29:35）。「主人はそのしもべに感謝するのでしょうか」しもべはほめたたえられるべきでしょうか？いいえ、ほめたたえられるべき御方は神であられる主、ただお一人であるべきです。ここまで何度も繰り返したとえられ、注目すべき存在として挙げられ、終わりの日に優れて偉大な働きを成し遂げる「イスラエルの残りの者」ですが、かといって決して彼らはほめたたえられる、崇められるような、礼拝対象になるような存在ではない、神ではない人がほめたたえられるということが決してあってはならないという

ことがここには強調されているのです。そのようなわけで、イスラエルの残りの者がひととき注目されるここまでの文脈においてこのたとえ、この一文は非常に重要です。ですから今一度強調してお伝えしておきます。神のご計画において確かにイスラエルは選びの民であり、その中から起こされるイスラエルの残りの者の存在は非常に重要です。しかし、彼らが賞賛され、ほめたたえられ、礼拝されるような存在となることは決してありません。ほめたたえられるべき御方は、永遠に天におられる父なる神と、その神とまったく一つになっておられる御子イエシュアのみです。

そしてこれは言うまでもないことですが、私たち教会がほめたたえられることがあってもなりません。たとえそれがどんなに優れた働きをする牧師、教師、また優れた賜物を持った者であったとしても、神ではない人がほめたたえられるようなことがあってはなりません。私たち一人ひとりにはみな「取るに足りないしもべ」であることを自覚しましょう。そしてそれぞれが主から「自分に命じられたことをすべて行」う者となれますようにと求めましょう。そうです、私たちはそれぞれ主から与えられている働きがあります。私たちは決してただ今という時間を自分のためだけに費やして生きるのではなく、主に命じられたことを行うという歩み、生き方を求めるべきです。なぜならやがてこの地に建てられる「神の国」とはまさにそのような場所だからです。それぞれが主から命じられる働きがあり、そしてそれを忠実に果たすことができ、それによって主がますますほめたたえられる世界、それが「神の国」です。私はこれまでの人生で一度だけこのようにほめられたことがあります。「あなたをお造りになった主はすばらしいですね」と。何をしてそのように言われたのかは覚えていません。それほど大したことではなかったのです。しかしそのほめ言葉、主への賛美は私の人生の宝物の一つになっています。きっと「神の国」ではこのような主への賛美があふれることでしょう。どうぞ私たち一人ひとりを通して主の御名がほめたたえられる、御国が来ますようにと祈りましょう。